

巻頭言

メディアセンターの役割

すだ しんいち
須田 伸一
(メディアセンター所長)



2019年4月に赤木完爾教授の後任としてメディアセンター所長に就任した。1982年に三田キャンパスでの学生生活を始めて以来、三田メディアセンター（慶應義塾図書館）とは長い付き合いがあり、1階の目録ホールにずらりと並んでいたカードラックの光景は今でもはっきりと思い出すことができる。当時は図書館に来て、カード目録で資料の所蔵を調べることからすべてが始まった。スマートフォンやタブレット端末でメディアセンターの蔵書を調べ、電子資料ならその場で情報にアクセスできるという今の状況に慣れた学生には想像がつかないだろう。

就任早々の4月下旬、メディアセンター所長としてアメリカ出張をする機会に恵まれた。オハイオ州コロンバス郊外では大学図書館関係者を集めた研究会に参加したが、そこでまず驚いたのは、アメリカの大学図書館が、その存在意義を大学関係者に認めてもらうために大変苦勞していることだった。アメリカの大学図書館では、スタッフの専門性が高く、採用に関しても図書館の裁量が大い反面、場合によっては他部門から孤立するようなこともあるらしい。それにインターネット環境の進展により、図書館や図書館スタッフの役割が大きく変化しつつあるとの認識も、参加者の多くに共有されていた。

図書館の役割の変化を感じることでできる一例が、アメリカの大学図書館における学習支援サービスの充実度だろう。アメリカ出張ではシアトルとコロンバスの2都市を訪れ、ワシントン大学図書館とオハイオ州立大学図書館を案内してもらったが、従来の図書館スペースが改修され、学生が自由に議論したり、授業で自由に使えたりする開放的な部屋がいくつもできていたのが印象的だった。いわゆるラーニング・コモンズで、三田メディアセンターに開館当初からあったグループ学習室の進化形ととらえることもできそうだが、学生の学習をサポートする人的な支援体制が整っていることがその特徴である。なお、どちらの図書

館においても、学習支援に加えて、図書館スタッフが大学教員の研究支援にも積極的に関与する姿勢が強く感じられた。

学習支援や研究支援に力を入れているという点では、本学のメディアセンターも同じである。たとえば、2019年9月から稼働している早慶図書館システムの共同運用をとりあげると、それは一義的には将来の国際連携を視野に入れた国際標準システムへの移行とみなすことができよう。しかしこれを利用者目線で見れば、今までのKOSMOSをグレードアップした「ディスカバリーシステム」が搭載され、慶應義塾大学や早稲田大学の所蔵資料に加えて世界の学術情報の検索が一度で可能になったという意味で、利便性が向上している。

もちろん、このシステムを活用するためには、利用者側の情報リテラシー向上も必要となる。情報量が増えた分だけ、文脈から切り離された文章のコピーが増えるというのでは、全く意味がないからである。「検索」といえばGoogle検索しか頭に思い浮かばない学生に、メディアセンターのサイトで検索することや、図書館に来ればレファレンス・カウンターで質問できるということをぜひ知ってもらいたい。

これからのメディアセンターが提供すべきサービスに思いをはせれば、学習環境や研究環境のトータルなサポートが、これまで以上に重要になってくることだろう。日常業務があるなかで、メディアセンター職員がそれにかかわっていくのか、またそのための専門的知識をもった職員をどう育てるのかなど、クリアしなければならない課題は多数あるが、それがどのような形をとるにせよ、全学の支持を得ることなくしてはその実現はおぼつかない。その意味で、図書館ができること、やろうとしていることを学内でもっと広報することも必要かもしれない。メディアセンターが今後も慶應義塾大学における学術活動のコアを担う存在であり続けるために、メディアセンター職員とともに努力していきたい。